

ふるさと 見て歩き

第145回

いぬ ぼえとうげ

犬吠峠

～石になった犬の言い伝え～

国道118号線の山方トンネル前の交差点を右折し、岩井橋を渡り、県道29号線の常陸太田市との市境を越えてすぐ、道路の右側に「犬吠峠 約400 m先」と書かれた常陸大宮市観光協会の看板があります。この犬吠峠は市内の西野内と常陸太田市(旧金砂郷村)を結ぶ険しい山道で、昔は交通の難所とされていました。この看板の「約400 m先」には何があるのでしょうか。



▲犬吠峠の道

【看板のその先には・・・】

この犬吠峠の看板にしたがって、竹やぶや傾斜のあつ峠道を15～20分ほど歩くと、そこには犬が口を開けているように見える大きな石がありました。この石は地域の人々から「お犬様」と呼ばれて親しまれています。その傍らには小さな石製の祠ほこらがあり、背面には「昭和五十七年一月吉日 山方町諸沢犬吠 会沢勲」と刻まれています。また、この祠に奉納されている木札を見ると「奉鎮犬頭霊神」と書かれており、この祠が「お犬様」関係のものであることが分かります。また、周辺には古い石製の祠のかけらがあり、現在の祠は造り替えられたものだと推測されます。なぜ、この大きな石は「お犬様」と呼ばれ、この地が「犬吠峠」と呼ばれているのでしょうか。この「犬」にまつわる謎を解くカギは地域に伝わる言い伝えにあります。

【犬にまつわる言い伝え】

『山方町誌 上巻』によると、次のような言い伝えが紹介されています。昔、山方村の常安寺じょうあんじが焼失した際、その寺の飼犬が峠に登り、寺の焼失を悲しみ、七日

七夜吠え続けることで火災を人々に伝え、そのまま石と化してしまいました。それ以来、この峠が「犬吠峠」と呼ばれるようになり、昔の山方宿の人々は犬の遠吠えが聞こえると火災に警戒したようです。この石と化した犬が先述の「お犬様」と呼ばれる巨石だとされています。



▲石と化した犬「お犬様」とされる巨石

一方、藤田 稔ふじた みのる氏の編著書、『茨城県の民話と伝説(上)』ではこの言い伝えに加え、2つの言い伝えを紹介しています。1つ目は犬が常安寺の焼失ではなく、御城(山方城)の落城を伝えたとするものです。2つ目は前述の言い伝えとは全く異なるものです。平安中期、前九年合戦の際、源 頼義・義家父子が金砂山にて敵軍と戦った時、峠に山犬(狼)の大群が現れ、頼義・義家方の軍勢に吠え続け、進軍を困難にさせたとして、この峠が犬吠峠と呼ばれるようになったというものです。

【言い伝えのルーツは火災への恐怖?】

山方宿は久慈川に沿った南北に長い宿場町で、冬の季節風が容赦なく吹き通します。そのため昔は火災のたびに類焼が多く、この地域の人々が火災の発生を恐れる心理から常安寺焼失の犬吠峠の言い伝えが生まれたと『山方町誌 上巻』では考察されています。犬吠峠の「お犬様」の巨石が口を開けている方向には山方宿しゆくがあります。昔の人にとって「お犬様」は宿の守り神のような存在だったのかもしれませんが。

【主な参考文献】

山方町誌編さん委員会編『山方町誌 上巻』(山方町文化財保存研究会、1977)、藤田稔編『茨城の民話と伝説(上)ふるさとと自然と動物』(有峰書店、1977)

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化振興グループ

電話:52-1111(内線343)